



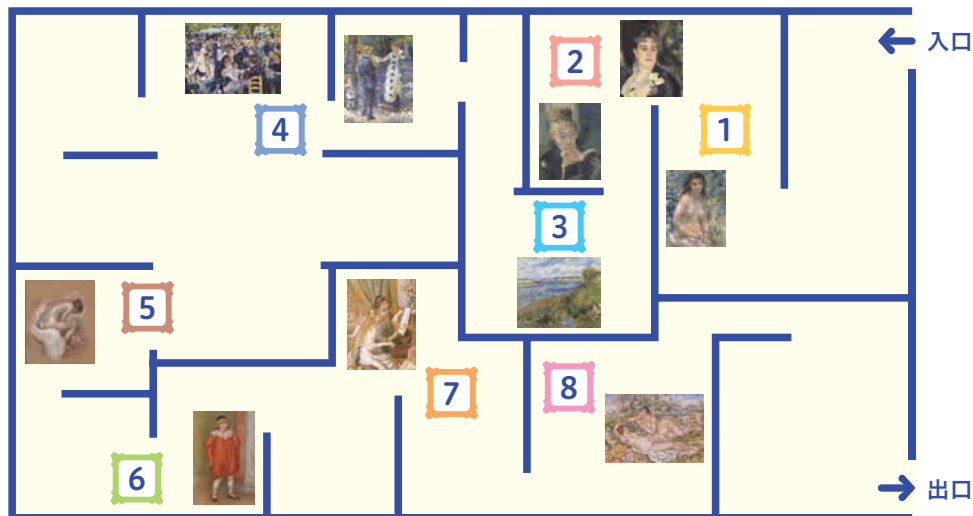
オルセー美術館・オランジュリー美術館所蔵「ルノワール」展 鑑賞ガイド

ルノワールド

へ よ う こ そ

かんしょう
この鑑賞ガイドでは8つのテーマに分けてルノワールの絵を見ていきます。
マップにそって、絵を見てみましょう。

てんじしつ
展示室マップ



- | | | |
|------------------------------|--------------------------|---------------------------|
| 1 太陽の光のもとで描く ^{えが} | 2 人物を描く ^{えが} | 3 自然を描く ^{しぜん えが} |
| 4 幸せそうなひとびとを描く ^{えが} | 5 デッサンをする | 6 子どもたちを描く ^{えが} |
| 7 ピアノを弾く少女たち ^ひ | 8 裸婦を描く ^{らふ えが} | |

かんしょう
この鑑賞ガイドでは、絵を3つのポイントから説明しています。

なにが
^{えが}描かれているか



どんなふうに
^{えが}描かれているか



どんな時代に
^{えが}描かれたのか



1 太陽の光のもとで描く^{えが}

ルノワールは、太陽の光をもとめて、カンヴァスを外へもっていきました。太陽の光は天気や時間によって変化するもの。ルノワールはそのときそのときで変化していく光を、筆のタッチや絵具の色であらわしました。



《陽光のなかの裸婦（エチュード、トルソ、光の効果）》

1876年頃

© Musée d'Orsay, Dist. RMN-Grand Palais / Patrice Schmidt / distributed by AMF



女の人のほだは、ところどころ明るく、
どうやら木かげの中にいるようです。



光とかげに注目してみましょう。光が当たっているところは明るく、そしてかげは暗く描かれています。かげは何色に見えますか。



女の人のまわりの木は青、黄色などの色で、筆のタッチが見えるような動きのある線で描かれています。



「印象派」とよばれた画家たち

ルノワールと仲間たちは一緒に外で絵を描き、太陽の光の中で見た風景や人物を明るい色と自由な筆のタッチであらわしました。こうしたりんかくがあいまいな絵は、まるであやふやな印象を描いているようだといわれ、かれらは「印象派」とよばれるようになりました。

2 人物を描く^{えが}

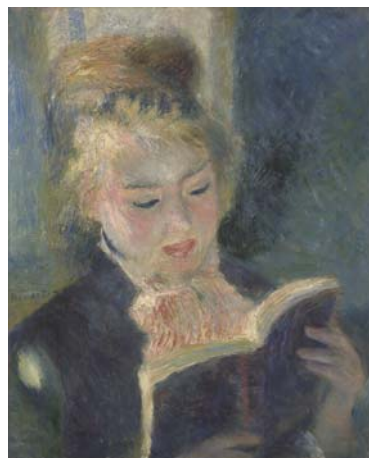
ルノワールはいいです。「ぼくは人物画家だ」。ルノワールはお金持ちのひとびとから注文をうけたり、恋人や友だちをモデルにしました。絵の中の人物はどのような生活を送る人なのか、想像しながら見てみましょう。



《ジョルジュ・シャルパンティエ夫人》^{ふじん}

1876-1877年頃

© RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Adrien Didierjean / distributed by AMF



《読書する少女》^{どくしょ} 1874-1876年

© RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF



この女の人は、出版社を経営していたジョルジュ・シャルパンティエの奥さんです。ルノワールの絵をたくさん買ってくれる人でした。



本を読んでいる、ほっぺたの赤いかわいらしい少女は、ルノワールの恋人だったのではないかとわれています。

今を楽しく生きる女の人たち



ふたりの女の人をくらべてみましょう。どのような暮らしをしている人だと思いますか。じつはふたりは、お金持ちの奥さんと、はたらく女の子という、まるでちがう生活を送っていました。ふたりとも流行のフリルのブラウスを着て、とても幸せそうですね。ルノワールは自分と同じ時代の、人生を楽しむ女の人たちを絵にあらわしました。

3 し ぜ ん え が 自然を描く

自分のまわりにある自然こそが美しいと思っていたルノワール。パリの外に出かけて、画家の仲間
と一緒^{いっしょ}にセーヌ川や草原といったのどかな風景^{ふうけい くふう}を工夫して描きました。



《シャンロゼーのセーヌ川^{がわ}》1877年

© RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF



パリを流れるセーヌ川は、パリの人にとっては身近なそんざい。パリにいたルノワールもセーヌ川の絵をたくさん描きました。



筆の動きがどこに向かっているかよく見てみましょう。風でなびく雲や草が、力強い筆のタッチで描かれています。



自然を前にして絵を描く

ルノワールは画家のモネと一緒に、たびたびセーヌ川の川ぞいで絵をならべて描きました。目の前の景色^{けしき}は、1日のなかで少しずつ変わっていくもの。その変わっていくようすを、ふたりは体で感じながら絵筆^{えふで}を動かしたのです。

4 幸せそうなひとびとを描く^{えが}

今からおよそ150年前、パリの町は大きく変わりつつありました。それまでは^{きそく}貴族のひとびとにだけゆるされたおしゃれやダンスパーティーを、ふつうのひとびとも楽しめるようになりました。ルノワールはこのようなひとびとが生活を楽しむ幸せそうなようすを描きました。



《ぶらんこ》 1876年

© Musée d'Orsay, Dist. RMN-Grand Palais / Patrice Schmidt / distributed by AMF



^{えがお}笑顔でぶらんこに乗っている女の人。
この人は、ルノワールの家の近くに
住んでいたジャンヌです。ジャンヌ
はリボンのついた^{りゅうこう}流行のドレスを着
ています。



ルノワールはここで太陽の光が当
たっているところやかげを、点で描
いています。近くで見ると、筆をたて、
よこ、ななめに細かく動かしたり、
たくさんの色を重ねているのがわか
ります。太陽の光が当たっていると
ころやかげにはどんな色が使われて
いますか。



ファッションの中心地、パリ

ルノワールが生きた時代のパリには、たくさんの洋
服屋ができて、ファッションの雑誌も^{ざっし}多く^{おお}売られ
るようになりました。ルノワールの絵には、流行の
おしゃれを楽しむ女の人が登場します。女の人^{とうじょう}
の洋服を見てみましょう。リボンやフリル、レースなど
細かいところまで描かれているのがわかります。



《ムーラン・ド・ラ・ギャレットの舞踏会》 1876年
 © Musée d'Orsay, Dist. RMN-Grand Palais / Patrice Schmidt / distributed by AMF



ここは、パリの丘の上、モンマルトルにあった、ムーラン・ド・ラ・ギャレット。みんながダンスをしたり、飲んだり食べたりするために集まる場所です。モンマルトルのひとびとは、平日はずっとはたらいしていました。そしてお休みの日よう日にはみんなでこうしてダンスをしに出かけたのです。



どんな筆のタッチで描かれていますか。明るく軽いタッチで、おどっているひとびとの楽しそうなようすがつたわります。

この絵では、ルノワールと親しかったひとびとがモデルになっています。



《読書する少女》のモデルだといわれているマルゴと、画家のカルデス。



モンマルトルで洋服を作るしごとをしていたジャンヌ（左）と妹のエステル（右）。ジャンヌは《ぶらんこ》にもでてきます。

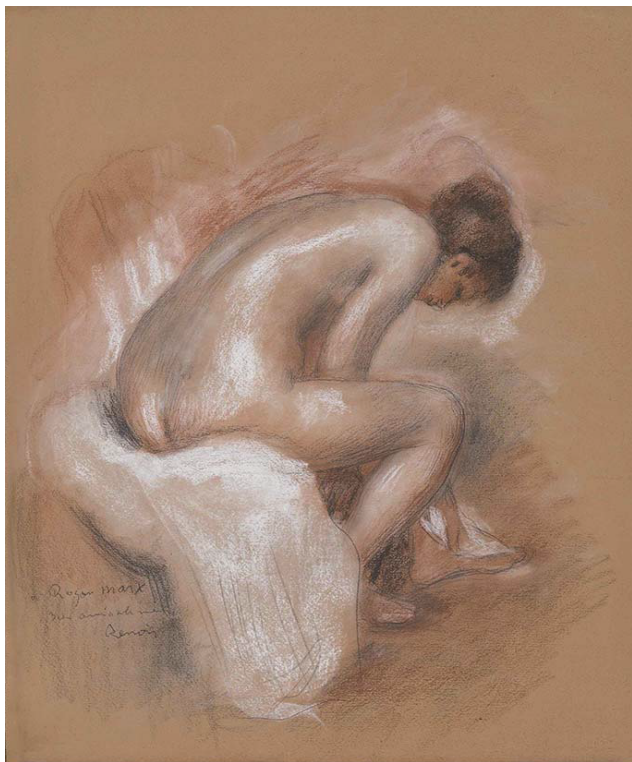


この絵が描かれているようすを見ている、リヴィエール（右）と画家の仲間のゲヌット（左）。



5 デッサンをする

デッサンとは、紙の上に、えんぴつやチョークを使って、人やもののかたちを描いてみること。
画家はひとつの絵を完成させるためにたくさんのデッサンをしながら、どのように絵を描くかを
決めるのです。



《身づくろい》 1890年頃

© Musée du Louvre, Dist. RMN-Grand Palais / Martine Beck-Coppola / distributed by AMF



前かがみになっている女の人は、おふろのあとで身づくろいをしてるように見えます。このあと洋服を着てどこかへ出かけるのかもしれない。



このデッサンでは、えんぴつ、白いチョーク、そしてサンギーヌとよばれる赤いチョークが使われています。少し茶色い紙にこれらの道具で色をつけることで人の体がくっきりと見えるように描いています。



イタリアでみつけた新しい絵の描き方

ルノワールは、40才くらいのとき、「かたちよりも色のあざやかさを大切にする印象派の描き方を追きゆうしてきたけれども、はたしてこれからもそれをつづけてよいのだろうか」と思うようになりました。そんなとき、イタリアへ旅行し、昔の芸術家たちによる、かたちがはっきりと描かれている絵を見て、デッサンを大事にする方法に、あらたな自分の表現をみつけたのです。

6 子どもたちを描く^{えが}

ルノワールは、大人だけではなく、子どももたくさん描きました。そして自分の子どもが生まれると、そのありのままの姿^{すがた}をしっかりと観察し、絵にのこしたのです。



《^{どうけし}道化師^{しょうぞう}(ココの肖像)》 1909年

© RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Franck Raux / distributed by AMF



白いタイツをはいた男の子は、ルノワールの息子のココ。タイツがチクチクして、ピエロのようなこの洋服を着るのがとてもいやだったそうです。ちょっとつまらなそうな顔も子どもらしくてかわいいですね。



ココのオレンジ色の洋服がとても目立つこの絵。そこに白いレースと青いぼうし、そしてココの青い目がアクセントになっています。



ココの洋服はふっくらとりったいてきに、そして体のりんかくはしっかりと描かれています。



家族ですぐすひとときを絵に

ルノワールはよくお金持ちのひとびとにたのまれて絵を描きました。そして自分や友だちの家族をモデルにすることもありました。ルノワールの絵には家族ですぐすなにげないひとときが描かれています。子どもたちはそこでとてもものびのびとしているのです。

7 ピアノを弾く少女たち

ルノワールが生きた時代には、ブルジョワとよばれる、貴族ではないけれどお金のある家庭のひとびとがふえました。ブルジョワの女の子たちは、家庭教師から勉強を学び、ピアノを弾いたり、本を読んだり、ぬいものをしたりしてすごしていました。



一人の少女はピアノを弾き、もう一人の少女はピアノに手をおいています。ピアノはブルジョワの家庭に必ずあるものでした。



この絵と、1の《陽光のなかの裸婦》、4の《ぶらんこ》と《ムーラン・ド・ラ・ギャレットの舞踏会》のかげの色と筆の動かし方をくらべてみましょう。この絵では、かげに青やむらさきは使われていません。かわりにオレンジや黄色が使われているので、絵が少しやわらかく見えますね。

《ピアノを弾く少女たち》 1892年

© RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

はじめて美術館で展示されたルノワールの作品



印象派の絵がまだみとめられていなかったルノワールの時代。仲のよかった詩人のステファヌ・マラルメと批評家*のロジェ・マルクスの助けで、この絵はフランス政府に買い取られることになりました。そして、「印象派の絵」としてはじめて美術館に展示されることになったのです。それはルノワールにとって、とても大きなことでした。

*批評家：あるものが良いか悪いかをはんだんする人

8 裸婦を描く

裸婦とははだかの女の人のこと。裸婦は、ヨーロッパの絵の歴史のなかで、多くの画家が挑戦するテーマのひとつでした。ルノワールもそれまで裸婦を描いたことはありましたが、人生の最後にふたたびとりくみました。



《浴女たち》 1918-1919年

© RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF



ねそべったり、ほおづえをついたりして、くつろぐふたりの女の人。そして奥では、どうやら、女の人たちが水浴びをしているようです。



この絵をよく見てください。まるで少し光っているように見えませんか。この絵はつやのある白い絵具をぬったあとに、うすくとした絵具をすこしずつ重ねて描かれました。

最後まで描きたかったもの



美術館が絵を買いとったり、ヨーロッパやアメリカで展覧会が開かれたりするほど画家として成功したルノワール。しかし、年をとるにつれて、病気のせいで手足が痛んでうまく動かせなくなってしまい、手に筆をむすびつけて絵を描きました。そこまでしてでも、裸婦の絵を描こうという強い気持ちがルノワールにはありました。

- 1841年(0才) ● フランス・リモージュにて洋服を作る両親の子どもとして生まれる。
- 1856年(15才) ● パリでうつわに絵を描く職人の見習いになる。
- 1862年(21才) ● 国立美術学校に合格する。
- 1864年(23才) ● 国の展覧会にはじめて絵が選ばれる。
- 1870年(29才) ● フランスとプロイセン(昔のドイツ)の戦争がおこる。
- 1874年(33才) ● 印象派の仲間たちでつくった展覧会の第1回目に参加する。
- 1881年(40才) ● 春にアフリカにあるアルジェリア、秋にイタリアへ旅行して、遺跡や昔の画家たちの絵に感動する。
- 1883年(42才) ● パリではじめてルノワールの大きな展覧会が開かれる。
- 1885年(44才) ● 奥さんのアリーヌとのあいだに息子がうまれる。
- 1892年(51才) ● 《ピアノを弾く少女たち》がフランス政府によって買い上げられる。
- 1902年(61才) ● 病気のせいで、歩いたり、筆をもったりすることがむずかしくなる。
- 1907年(66才) ● 南フランスにある、海に近い町カーニュに家建て、住みはじめる。
- 1914年(73才) ● 第一次世界大戦がおこり、息子たちが戦争へ行く。
- 1919年(78才) ● フランス・カーニュにて亡くなる。



《アトリエで座るルノワール》1892年以降
© Musée d'Orsay, Dist. RMN-Grand Palais / Patrice Schmidt / distributed by AMF

オルセー美術館・オランジュリー美術館所蔵

ルノワール展

2016 4/27(水) - 8/22(月)

国立新美術館 企画展示室1E

休館日：毎週火曜日

※ただし、5月3日(火・祝)、8月16日(火)は開館

開館時間：10:00~18:00

金曜日、8月6日(土)、13日(土)、20日(土)は20:00まで

※入場は閉館の30分前まで

主催：国立新美術館、オルセー美術館、オランジュリー美術館、日本経済新聞社

後援：在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

協賛：アサヒビール、NEC、花王、KDDI、損保ジャパン日本興亜、第一生命、

ダイキン工業、大日本印刷、大和証券グループ、大和ハウス工業、

みずほ銀行、三井物産、三菱商事

特別協力：テレビ東京、BSジャパン 協力：日本航空

新

M
O
Musées
d'Orsay et de
l'Orangerie

世界を読む 未来を読む
140th
日本経済新聞創刊140周年

「ルノワール展」鑑賞ガイド「ルノワールへようこそ」

編集：国立新美術館 教育普及室 執筆：井上絵美子(H27年度教育普及室・研究補佐員)、森崎由衣(H27年度教育普及室・インターン)

デザイン：森重智子(美術出版社 デザインセンター) 発行：国立新美術館、日本経済新聞社 発行日：2016年4月27日